

夏期福音特別集会（御殿場）（4）

わが主キリスト

――イザヤ書第52、53章――

1990年8月12日

小池辰雄

キリスト直結 預言者の使徒的 去るもの日に近し アインシュタイン 人間の根本問題へ
ンリー・フォード ヒポクラテス ゲーテ 吉田松陰 イザヤ書53章 宗教大国という大悲
願 わが主キリスト 聖書くらい楽しい本はない 無者 南無キリスト 霊言の実体はキリス
ト 原動力は聖霊の他ない 人を福音の世界へ入れてください 私の天国はダンテの天国とは
違ふよ

【イザヤ52】（私訳）

13 見よ、わが奥義を行じ、挙げられ、高められ、いと高くなる。

14 多くの者汝に驚異した如く、そは、その面影害^{そこな}われて人ばなれし、その
容姿^{すがた}人の子からも外^{はず}れていたので。

15 その如く彼は多くの国民を驚嘆せしめ、諸々の王は彼ゆえにその口を緘^{つぐ}む。
そは彼ら未だ語られなかったことを見、未だ聞かなかったことを悟ったから。

【イザヤ53】（私訳）

1 誰が信じたか、我らの聞きしことを。エホバの腕^{かいな}は誰に現れたのか。

2 彼はみ前に芽生えの如く、乾ける地からの根株^{ねかぶ}の如く生い立った。彼には
容姿なく、見るべき端麗さなく、我らが慕うべき見栄えもない。

3 彼は蔑^{さげ}すまれ、人々に棄てられ、苦患^{くるしみ}を知る悲痛^{かなしみ}の人であつた。ひとは顔
を隠して彼を卑^{いや}しめたが、我らも彼を意^{こころ}に介けなかつた。

4 まことに彼は我らの苦患^{くるしみ}を荷^{にな}い、我らの悲痛^{かなしみ}を負っていたのに、我らは彼
をこう見なした、神に打たれ苦しめられているのだと。

5 否、彼は我らの不義の為に刺し貫^ぬかれ、我らの罪のために砕かれたのだ。
彼に対する懲罰^{こらしめ}は我らの平安となり、傷痕^{きず}だらけの彼によって我らは治癒^{いや}さ
れた。

6 我らは皆羊の如く迷いゆき、各々その路に向かった。然るに神^{エホバ}は彼の中に
ぶち込んだ、我らすべての罪を！

7 彼は迫害されたが耐え忍び、しかもその口を開かなかつた。屠場^{ほふりば}に索^ひかれ
る羔^{こひつね}の如く、毛を剪^きる者の前の雌羊の如く、彼は黙してその口を開かなか
つた。



8 彼は虐待と断罪によって取り去られた。だが誰が慮おもったか彼の命運を！
彼が生者しょうじやの地から断たれわが民の罪過の為に打ち殺されたとは。

9 彼の墓場は悪人と共に設けられ、彼の死に当たっては富者と共に。彼は乱暴をはたらかず、その口に虚偽いつわりはなかったのに。

10 神は彼を砕くことを欲ねがい、彼を刺したのである。もし彼がその生魂いのちを罪の犠牲に供したとするなら、彼はその後裔すえの末永き日を見、神の法悦よろこびは彼の手にて満たされたわけだ。

11 彼はおのが煩勞いたづきを見て心足りた。わが義しき僕はその知によって多くの者を義とし、彼らの不義を彼は荷おっている。

12 この故に我は多くの者を彼の分前わけまえとし、夥おびただしい獲物わかを頒ち取らしめる。そは彼れおのが生魂いのちを注ぎ尽くして死を招き、不義なる者の数に入れられたが故に。げに彼は多くの人の罪を負い、不義なる者たちのため執り成しを果たした。

●キリスト直結

私の兄貴、内村鑑三、藤井武、塚本虎二、手島郁郎。この五人は私の個人の歴史において、でつくわした非常に大事な五人です。この手島さんに、

「是非、先生、来て話をしてくれ」

と、私は実は招かれた。それで、阿蘇に出掛けて行つた。彼は自分の群を「幕屋」と言つてゐる。「幕屋」の唱道者は私だった。彼は私よりか数年後輩ですけれども。彼の手紙が百通ばかりあります。彼の一番弟子ともいつてもいい、最初からいるY君というのが彼の伝記を書きました。彼の伝記の三分の二位を書いて、イスラエル戦争の前あたりまで書いて、私に

「是非読んで、序文を書いてくれ」

と言つてきたので、こないだ序文を書いてやりました。手島さんの誕生日が多分8月26日だと思いますが、それまでに本になるそうです。手島さんは、なかなか、海仙山仙といつては悪いけれども、多角的な人物で、しかし、彼に燃えていたもの、これは本ものです。

しかし、なかなか、人のやらないことをやるものだから、殊に火渡りなんかやるものだから、無教会のご連中に、

「あれは本当は福音的でない」

というようにすることに、のけ者にされた。彼と一緒にやっていた私は――一緒にいったつて、全部一緒じゃないけれども――一緒にまぎぞえをくつて、

「小池もおかしくなった」

と。正直、1950年11月3日から5日にかけての集会で、皆さんも御存知のとおり、私はひっくり返つたから。「エン・クリスト」43号にも書きましたね。我々をのけ者にした。我々



は無教会のアウトサイダーにされた。ところが、我々はキリストの直弟子のインサイダーだから、痛くもかゆくもない。むしろ、

「お気の毒さま。本当に聖霊を受けないで何ごとか」

と、いいたいわけなんです。我々をおかしく言うならば、キリストの直弟子、パウロ、ヨハネ、ペテロ、ヤコブ、彼らをおかしいと言っているなら、わかる。

「我々よりもはるかに素晴らしい彼らをおかしいと言わないで、まだそれ以下の次

元の我々をおかしいなんて、それほどおかしいことはない」

と、こないだ書きましたね。全くそうなんです。我々は限りなく、キリストに在って使徒的な世界に進んでゆく。キリスト直結、信仰の質は使徒的と、これは間違いないです。

● 預言者的使徒的

幕屋の人たちは、

「お父さまー！」

と祈っているんです、「キリストのお父さま」と。いいよ、それで。けれども、私にとっては、もうキリストが一切であります。キリストは、父なる神に「父よ」と言って祈られた。例えばこんな具合に祈れと、「主の祈り」がありますね。けれども、私にとってはもう、

「主さまー！」

の他にない。人それぞれだから、どれでも結構だが、私にとってはそうなんだ。キリストなくしては、私はありませんですから。召団の皆さんもみな同じお気持ちだと思いますが。本当の世界はただ概念の世界じゃないから。キリストの直弟子の次元、また預言者の素晴らしい次元、これをうって一丸とした、「預言者的・使徒的」という。特に無教会では「預言者」ということはよく言いました。これは聖霊以前の世界ですから、いくら「預言者」でも。ところが、無教会は「使徒的」ということは余り言わない。ということは、本当に聖霊を受けていないから。信仰的には私の恩師といたい藤井先生も、その点では使徒行伝は余り興味ない。結局、聖霊以前の世界です。先生が聖霊をいい加減にしたとは言いませんけれども、その点で惜しむべきかなということなんです。いわゆる旧約的な義が強い。

パウロは正直、凄い。本当に選びの器ですね。彼があつたので、キリスト道は、聖書はいつまでもあらゆる思想に対して勝つていった。ヨハネだけではダメですよ、その点では。そういう特別な器で、パウロはありますが。しかし、我々は、パウロであろうと、ヨハネであろうと、ペテロであろうと、どれでもキリスト中心ですから、キリストの光でそれぞれの良さが見えてくる。ヨハネも、ペテロも、パウロも、ヤコブも、どれも本当に見えてくる。これは本当に有難いですね。キリストの光というものは大変なものです。

今日は、キリストの最大の預言である、イザヤ書53章です。私は第十卷（『聖書は大ドラマ



である』1988年刊）を書いた時に、いつ死んでもいいと思った。この第十巻は私の全生命の打ち込みの本で、やがては、詩を完成するつもりですけども。その矛盾の構造です。いつ死んでもいいし、詩が完成するまでは死ぬわけにはいかんと。本当の世界は、言葉の一番深い意味に於て矛盾している。それは、普通の論理の世界では分らない。

どうぞ、皆さんは、もし私を覚えてくださるなら、第十巻で覚えてください。私が向こう側に行ったら、告別式も何も要らん。墓も要らん。ただ、この十巻をもつて私を覚え、あるいは、召団の伝道集会はいくらでもご自由になさっていただきたい。そういう意味で、実に私も晴々しています。

● 去るもの日に近し

ただ、私に於ては、個人的な問題ですけども、27歳で仆れた兄、これは仆れるはずのものではなかった。昨日の私の詩の中にも書いてありますが、彼は知っているんです、なぜ中国にやられたか。こんな事は言いたくないけれども、上役の人が――私の兄貴はもの凄く英語ができたから、小池政美といえ一高時代に英語の代名詞だったんです。それで、ロンドンに行くはずになっていた――その内定をひつ繰り返して、その上役が自分の知っている人をロンドンの方にやって、私の兄貴を北京にやった。これが、いわゆる運の尽きだ。だけれども、兄貴は、

「もう日本に帰らない。支那で伝道する」

と、その伝道の地図までありました。その兄貴が仆れた。これは、本当に私にとっては、地上の生涯の終わりまで絶対に忘れることができない。また、いつも兄貴は私と一つとなつて、天界から応援しています。

「去るもの日に疎し^{うと}」

じゃない。「日に近し」です。

それと、何といつても、我々五人の兄弟たちのために、父のなきあと――私の五歳の時に父は亡くなりましたから――独力で母は女学校の先生をして私たちを育ててくれた。大変な苦勞でした。しまいには、胃腸をこわして、身体的にもかなり弱っていました。過勞です。そのところへ、せつかく頼んでいた兄貴が北京で仆れましたから、帰りの船の中で失明してしまつた。だから、私は母の肖像（写真）はいつもこのポケットに入っています。この兄とこの母は、私にとつての二つの十字架。それが私の推進力になっている。人間は、あなた方もいろいろなご経験を、それぞれお持ちと思いますが。しかし、これはみんな本当にキリストに在つて、いよいよ私たちは証し人となるというための、皆さん一人ひとりの十字架であります。

今朝も、裾野召団の或る姉妹のために祈りました。そのお子さんの熱も下がったと思います。その方も十字架を負っている。日本の、信仰をお持ちのご婦人の方は、旦那がいい



加減な信仰、或は信仰を持たないでアンチ・クリストで、非常に十字架を持っていらつしやる方がかなりある。けれども、必ず、その苦しみの中での凄い力がやってくる。必ず勝ちます。キリストは勝たさせ給う。その点では、絶対に弱気になる必要はないですから。どうぞ、戦ってください、それは本当の担いね。

●アインシュタイン

アインシュタインという人があります。彼は少年の時に道に落ちていた釘を拾っていた。

「何だ、お前は釘なんか拾って、どうするんだ」

「いえ、人がこれを踏んで傷つくといけないから、私は拾っている」

先生は彼がユダヤ人であることを知って、ユダヤ人だから嫌っているんだよな。そんなことする必要あるか、ということ、そんなことを言われたものだから、アインシュタインはつらくて走って家に帰ってきた。そうすると、他の生徒たちが、あいつはまた走って逃げて行くな、とまた嘲る。お父さんに言くと、

「いいよ、お前はしっかり勉強して、人のできないことをやれ」

と、お父さんに励まされた。それで彼はものすごく勉強しまして、そしてとうとう物理界の第一人者になったでしょ。アインシュタインはもちろん信仰を持っています。原子力の最初の発見者。これが今度は、アインシュタインは平和を望んでいるのに、戦争のために使われるようになり、これは非常に嘆き悲しいことで、もちろん湯川さんもその一人になって、

「これは戦争のために絶対に使うな、文明のためだ」

ということでありませうけれども。要するに、原子力が恐いのではない。核爆弾が恐いのではない。一番恐いのは人間の心。心が地獄にもなり、天国にもなる。その心の問題。

●人間の根本問題

昨日の晩に各召団のおもな方々とお話ししあつたんですが、実は、私は今度の五十周年の記念の講演（聖書伝道五十年記念講演 1990年9月29日 於中央大学駿河台記念館）に、「新宗教改革」と題してしゃべろうと思った。けれども、実は、新宗教改革というのは、マルチン・ルターの宗教改革をもう一つ新しくという、そんなことではない。だから、「新宗教改革」という命題は逆に躓きにもなる。私の気持ちもこれでは表し切れない。何とかなと、いろいろお話しをした。

私は、多分こういう題になると思います。「人間の根本問題」（後に「人間存在の焦点」に変更）。「宗教」という言葉を使うと、

「ああ宗教か」

といって止めてしまうやつがある。「宗教」という言葉はよそうじゃないかと。「人間」、こ



れは世界中みんな人間だ。どんな人種であろうと、どんな国民であろうと、みんな共通の表現ですからね、その「根本問題」。これは政治家だろうと、実業家であろうと、学者であろうと、お医者であろうと、何であろうと。この根本問題を本当に解決して持つていなければ、という極めて普遍的な題であるから、多分、こうするだろうと思っています。何行か註は付けますけれどもね。そんな気持ちです。キリスト教と仏教は世界の二大宗教ですから、これを融合した話になると思います。勿論、中心はキリストです。これは、もう桁違いという言葉でもいい表せない、桁違いの人です、キリストは。もちろん、私は、そこははつきり言いますよ。大変な人、大変な神人。やはり、イスラエルという民族は結局人類の最高の人物を出したなあと思います、歴史的なね。神さまの聖意で。

世界の歴史は多分、ヨハネ黙示録にあるとおり、大きなカタストローフェが来るでしょう。ひっくり返るでしょう。これは、人間の不信がもたらすところの結果だから、仕方がない。人類が全部、神に立ち帰るなんてことはありえない。

けれども、人の悩み苦しみを本当に背負わされているのは、キリストと一緒に背負わされているのは、我々だから。そこには、聖霊の力がなければ、背負うことができない。聖霊というのは、何ものとも代えることができない力ですから。

「運命環境どうでもござれ、調子が悪くなればなるほど逆に力がくるぞ」

と。これは本当です。そういう、あなた方はキリスト者です。そこのキリスト教とは違うんだ。そういうわけで、どうぞ、力強く行きましょう。私たちは垣根なんか造ってやしない。各召団は、垣根なんかありやしない。出て行く奴は出て行けばいい。入る人は、入って来たらいい。そういう、境のない世界なんだ。全世界どこへいこうとも。それだけの、突き抜けた大きさを、広さを、

「その愛の広さはいかばかりなるか」

とパウロが言っているでしょ。そういうことで行きましょうや。人間的な、いわゆる一致団結なんて、そんなことを言う必要は何もないんだ。いいですか。そのような気持ちで、

「さあ、時には皆で集まりましょう」

「ああ行くよ」

と、そういう自由な気持ちでもって、皆さん、今後やってくださいよ。私はいつ仆れるか分からないから。大丈夫、できると信じています。聖霊がなければできません。十字架・聖霊が本当になればできません。これはもうはつきりしています。また、あれば、必ずできる。できなければ、人間的なものにこだわっているからと。こういうこと。それで行きましょうね。

●ヘンリー・フォード

今、自動車の時代だな。自動車を一番先に造ったのは誰だ。ヘンリー・フォード。フォー



ドという人のことをちよつと言っておこうかな。あのヘンリー・フォードというのは、1873年の1月30日の生まれで――私は大事な人物やあなたの方の、知っている生年月日をこの十巻の欄外にみんな書いてあるんだ、その所を見ると、その日特にその人のために祈る――フォードがお父さんと汽車を見にいつて、ああ素晴らしいなあと、だけれども汽車を見ながら彼はあつた一つの夢を抱いた。何か他の乗り物をと。あれは軌道に乗つかつてゐるけれども、軌道のないようなものと。

彼の12歳のときにお母さんが病に罹つて、もういよいよ臨終だという。

「お母さん、なぜ待つていてくれないの。私をもう少し待つていてくださいな」

と。そうしたらお母さんが、

「お前は機械が好きだね、機械いじりのその才能を伸ばして、人のためになるようなものをお造りなさい」

と、これが最期のお母さんの遺言です。それで、そのお母さんの遺言によつて、彼は励んで、とうとう自動車を完成した。1893年。そして、1903年にフォードの自動車会社を創設しました。流れ作業も彼が初めてやつて、どんどん造られた。そういうことを見ましても、お母さんの最期の一つの言葉が彼を本当に奮い立たせた。それで、とうとう、賃金も大いにやつて、労働問題も起きやしないです。

人間の死というものは、

「百行二死に如かず」

という詩をいつか書きましたね。百の行為、行いは非常に大事なことだ。言葉よりも行為だ。しかし、一つの死という行為は、その百行にもまた優るものだ。私にとって、兄貴の死はそういう死なんです。

●ヒポクラテス

もう一つお話したいのは、ヒポクラテスの話です。医学の祖ですね。紀元前460年頃に生まれて、374年頃に亡くなつてゐる、ギリシヤの医学の祖です。ヒポクラテスの言葉は非常に参考になる。少年時代から地中海の方々を旅をしました。そして、名医を尋ねていろいろな教えをうけたまわつた。そして、それぞれの土地の気候風土、その気候風土に即した食物。気候風土とその食物と人間の関係がいかに密接であるかということ。文明がいき過ぎて、イチゴなんかしょつちゅう食べられるが、ダメだあんなの。本当は、イチゴは6月か。柿は秋の晩秋に。スイカは真夏に。ちゃんと、気候風土に適した食べ物があるのに、それを文明はその法則を破つてゐる。決して体のためにならない。珍しいといつて食べたつてダメなんです。そのことをヒポクラテスははつきり言つた。

「自然の有^もつ力をよく研究しなさい。また、それに頼りなさい。自分が賜つてゐるところの本来の力、必ずそれでもつて治つてゆく、病氣に罹つても。本来の力と



自然の力で治ってゆく。お医者さんや薬は、ただ助けに、その補助に過ぎない」と、最初からそういうことを言っている。

「病気を治すものは、医者でもなければ、薬でもない。自然環境と、人間が自然にもっているところの力によるんだ」

ということをやっている。だから、お医者さんは産婆役である。哲学の世界でも、ソクラテスが言いましたね。人間は本来は考える力を持っている。その産婆役をするんだと。そして、患者に信頼される医者であれと。患者と医者との関係が、信頼関係でなければダメだ。我々の集会もそうでしょ。信頼関係がなければダメなんだ、お互いに、主に在るところの。信愛関係といってもいいです。それは、医者を信じていますからね、自分の。だから、その信の世界は、それはやはり氣の世界です。これが非常に体を元へ戻す力を持っている。彼はこの精神力というものを、魂の世界を忘れない。そして、有名な、

「人生は短く、技術は長い」

「ホ ディオス プラクシス、ヘー デー テクネー マクレー」

という。あの句は「技術」という言葉を「芸術」という言葉になおして、『ファウスト』の本に書いたのはゲーテですけれども。あれは、元はギリシヤ語ですね。医学の術は限りなくある、しかし、人生は短いから、次から次へとバトンタッチして研究していこうと。そういうようなことです。

●ゲーテ

私たちが本来神さまから賜っているところの生命力、環境、大自然。この大自然の奥に必ず神的なものを見てたのが、ゲーテなんです。そこらが普通の人と違う、あの詩人は。神・大自然・我というものが融合している世界を彼は持っていた。だから、ゲーテというやつはでつかい。もし、ドイツで第一人者といったら、私は文句なしにゲーテと言いたい。ルターは精神界で土台を築いた人ですよ。ルターなくしては、ゲーテはないと、それはちよつと言い過ぎですけども、それくらいルターは大事な人でありますけれども。広さ、幅、大きさといったら、もうこれはゲーテだ。これは、やはり大自然と心を一つにしているから。そして、大自然において神を見ているから。もちろんゲーテは、信仰的には唯一神ですよ。芸術家としては、多神なんだ。いろんなギリシヤ的なものをいくらでも使う。それから、科学者としては、汎神論的なんだ。どこにも神の力を見ている。決して一つの主義でもって収まるような人ではない。ゲーテはかくかくであるといつて、イズムの中に入れたらダメなんです。超イズムの世界ですから。我々も超イズムなんです。この福音の世界は、「何々教」でもない。しかも、それは排他でなくて、偽りでないものはすべて包摂してしまう。そういうことです。



●吉田松陰

これは西郷隆盛（南洲）の言葉です。

耐雪梅花麗（雪に耐えて梅花麗し）

経霜楓葉丹（霜を経て楓葉丹し）

如能知天命（もし能く天命を知らば）

豈敢利己安（あに敢えて己の安きを利らんや）

（梅の花は、厳しい冬の雪に耐え忍ぶからこそ、春に見事な大輪を咲かせ、美しく香る。カエデの葉も、秋の冷たい霜を経験するからこそ、鮮やかな赤色に紅葉するのだ。もし人が、天から与えられた自分の使命というものを本当に理解しているならば、どうして自分一人の目先の安楽や、我が身の安全などをもくろむことがあるのか、いや、決してそんなことはしないはずだ。）

「天命を知らば」というのは、頭で知るのではない。天命をからだで感ずるならば、自分の安きなんか考える必要はないと。やはり、南洲あたりも、それはキリスト教じやないでしょうけれども。「天」という言葉は、これは、孔子がそうです、特に孟子がそうなんです。いわく言いがたきところの、絶対界の、霊の存在を「天」という。そして、この天が地に降りてくる。天地融合。天地融合になつていたのは、正にイエス・キリストです。

あなた方、ご自分の世界でもって、どうぞご自分らしく大いに証しして行つてください。これ、楽しいからね。なさっていると思いますが、大いにこれからも続けてください。

●イザヤ書53章

それでは、原典にちよつと戻りましょう。イザヤ書の53章。本当は52章13節からです。

私の訳で読みます（第十巻の「8月9日〜12日」の項）。

【イザヤ52】（私訳）

13 見よ、わが奥義を行じ、挙げられ、高められ、いと高くなる。

14 多くの者汝に驚異した如く、そは、その面影害そこなわれて人ばなれし、その容姿人の子らからも外はずれていたのだ。

15 その如く彼は多くの国民を驚嘆せしめ、諸々の王は彼ゆえにその口を緘つぐむ。そは彼ら未だ語られなかったことを見、未だ聞かなかったことを悟ったから。

【イザヤ53】（私訳）

1 誰が信じたか、我らの聞きしことを。エホバの腕は誰に現れたのか。

2 彼はみ前に芽生えの如く、乾ける地からの根株ねかぶの如く生い立った。彼には容姿なく、見るべき端麗さなく、我らが慕うべき見栄えもない。

3 彼は蔑さげすまれ、人々に棄てられ、苦患を知る悲痛かなしみの人であった。ひとは顔を隠して彼を卑いやしめたが、我らも彼を意に介かけなかった。



4 まことに彼は我らの苦患くるしみを荷にない、我らの悲痛かなしみを負っていたのに、我らは彼をこう見なした、神に打たれ苦しめられているのだと。

5 否、彼は我らの不義の為に刺し貫ぬかれ、我らの罪のために砕かれたのだ。彼に対する懲罰こらしめは我らの平安となり、傷痕きずだらけの彼によって我らは治癒いやされた。

6 我らは皆羊の如く迷いゆき、各々その路に向かった。然るに神エホバは彼の中にぶち込んだ、我らすべての罪を！

7 彼は迫害されたが耐え忍び、しかもその口を開かなかった。屠場ほふりばに索ひかれる羔こひつじの如く、毛を剪きる者の前の雌羊の如く、彼は黙してその口を開かなかった。

8 彼は虐待と断罪によって取り去られた。だが誰が慮おもったか彼の命運を！

彼が生者の地から断たれわが民の罪過の為に打ち殺されたとは。

9 彼の墓場は悪人と共に設けられ、彼の死に当たっては富者と共に。彼は乱暴をはたらかず、その口に虚偽いつわりはなかったのに。

10 神は彼を砕くことを欲ねがい、彼を刺したのである。もし彼がその生魂いのちを罪の犠牲に供したとするなら、彼はその後裔すえの末永き日を見、神の法悦よろこびは彼の手にて満たされたわけだ。

11 彼はおのが煩勞いたづきを見て心足りた。わが義しき僕はその知によって多くの者を義とし、彼らの不義を彼は荷おっている。

12 この故に我は多くの者を彼の分前わけまえとし夥おびただしい獲物を頒わかち取らしめる。そは彼れおのが生魂いのちを注ぎ尽くして死を招き、不義なる者の数に入れられたが故に。げに彼は多くの人の罪を負い、不義なる者たちのため執り成しを果たした。

これが全訳です。もう、私が何も解説する必要はない。ヘブライ的な「知」というのは、全存在的な悟りの世界です。日本人は砂漠の民でないから、仏教的な世界は、むしろとりやすい。感じやすいんです。砂漠の血なまぐさい世界は、日本人には本当は肌には合わない。正に、気候風土に合わないものだから、キリスト教はなかなかとりいれられない。

●宗教大国という大悲願

けれども、仏教の世界は――ま、仏道といたいんだけれども――主として悟りの世界なんだ。悟入する世界。それも大事なことです。だけれども、仏教の世界では、文化は推進していかない。それがまた、ある意味においては、良かったかも知れない。あまり文化文明がいき過ぎてしまつてね。ところが、創造の神さまはものをどんどん造つてゆく。その創造の力をいただいたものだから、西洋の文明は、どしどしその創造力を――ギリシヤ文化もその中に混ざつてきますけれども――とにかく、そういった推進力を持っている。



そこはもう、西洋の文化の方が優れている。学問が進むわけだ。それから、自然的な、文明の世界の利器というものが展開していく。だけれども、そこで気をつけなければならぬのは、それを私するわけだ、今度は。

「オレたちがやっているんだ、神さまの力によっているのではないんだ」と。自然をも勝手に利用している。

ゲートが言いましたように、造られた者によって、造ったものが――これは西田先生も同じことを言っていますが――やつつけられる。困る時が来る。それが、今の20世紀の世紀末的な現象でしょう。それで、ペレストロイカが始まったわけだ。いろんな意味で困ってきたものだから、ソ連は、行き詰まってきたから。あのチェルノブイリ原発事故の後遺症が今でも大変出ている。秘密にしていたが、もうダメだと。あれはやりそこなって、反って良かったですよ、ソ連が。

また、話はいろいろとびますけれども、広島、長崎の原爆、この原爆の力でアメリカはソ連を抑えたんです、スターリンを。本当は、日本は、北海道はソ連、本州はアメリカ、九州は中国、四国はイギリスに四分されるところだった。これは参謀本部で決まっていたんです。連合軍の参謀本部で。ところが、アメリカが桁違いなものを造ったものだから、もう止めだと、それは。そして、アメリカが全部日本を被うことになった。あの広島と長崎の犠牲において、あの大きな犠牲に於て日本は助けられた、とも言えるんですよ。それであるのに、今度は――「一億総懺悔」なんてあの頃言ったよ、総懺悔なんかしてやしない――とんでもない思い上がりになってしまつて、経済大国になった。これは、

「宗教大国にならなければダメだ」

と、私は書いたでしょ。皆さんは、あなた方は、「宗教大国」という大悲願を課せられているところの戦士なんだ。聖霊の力で戦ってくださいよ。ただ「十二召団」なんて言っているのではないですから。そういう気持ちでもって、特に青年諸君は、それから、お母さんたち、昨日から申し上げているとおり。友人を、

「この世界に來い。中央大学記念館での講演会の話聞きに行け」

と無理やりでも引つ張つてきたらしい。騙だまかされて行ったら、良かったと。「この友人は」というのを――いい加減なやつを連れて来たらダメですよ――「この友人は」というのをとつかまえて、そして、一人を本当にこの世界に入れていただきたい。私は、特に青年に来てもらいたいね。政治家、宗教家、誰が来たつていいよ。人間小池なんて、こんな貧弱な野郎がね、これは仕方がない、預言者にされているんだから。だから、語らざるを得ない。なんと思われても構わない。はつきり言います。

●わが主キリスト

「日本キリスト召団」というのは、皆さん一人びとりは、素晴らしい課題を負わされ、また、



キリストの栄光を期待されている。この「わが主キリスト」は、あなた方お一人ひとり、正に「わが主キリスト」を告白しながら、存在をもつて行動をもつて、

「我はキリストの有^{もの}なり」

といって進んで行く。キリスト者というのは、本当にキリストと一つだ、一如だ。一つになつていなければ、力はないんです、仰いでいたんじゃ。

「信仰」という言葉は、もう私たちには要らない。「仰」ぐのではないんだから。キリストのところへ「行」くんです。「信行」。そして、キリストの中に入ってしまう。すると「交」わる世界、「信交」。キリストとの魂の交わりの世界。存在的な交わりの世界。「神―キリスト―我」という、三重の構造の世界です。十字架という門を通って行く。こっち側じゃないんだ、もう、中に入ってしまったている。

「主さま！」

という一言でもって、直ちにその世界に入る。簡単なんだよ、本当に。

「人がどうだ、先生がどうだ、自分がどうだと、そんなことではない」

というんだ。「主さま」と、それでもってその中に入ってしまう。相対的な問題をいつまでも問題にしているうちは、いつまでたつてもダメ。相対的存在でありながら、絶対の世界に入っていないければ、それを現実にしていなければダメ。しかも、相対であるんですよ。そういう、矛盾構造が本当の宗教の世界なんです。割り切つてない。割り切つてないが、そこが、現実の本当の世界になるんです。はつきり言います。

「主さま！」という一言で、電車の中でもどこでもいいよ、黙つて「主さま」と一言すれば、もうそこは天国だ。よく私は、列車の中で隣りの人にお話しかける。まずチョコレートかなんかをやってから。具体的な行動をしなければダメだからね。

「あなた、どうですか」

てなこと。不思議だよ、そうすると。不思議はなしになってくるからね。喜んで帰つてゆく。それから先、どうなるか知らんけれども。

「変な人が私に話しかけたが、やつぱりあれ、言っていることは本当だった」

といつかは気が付くときがあるでしょう。それでいいんだ。

●聖書くらい楽しい本はない

イザヤ書というのは、凄いからねえ、本当に。まあどうして、こんな預言者がいたかと思う。イザヤを一番直接受けとっているのが、パウロです。旧約のイザヤは、新約のパウロです。これが中心です。キリストの両翼みたいだね、イザヤとパウロは。もちろん、他の預言者もみんなそれぞれの役割がありますよ。私は甲乙しているわけじゃないですけども。まあ、不思議な構造だね。

だから、聖書くらい楽しい本はないです、読んでいて。本当にドラマだ。教えの本じゃ



ないから。神さまの救いの歴史の本だから。歴史そのものが未来を預言している本だから。そうして、聖書を――何ももつたいぶっているのではない――読まなくては。ある時は、一冊くらい引っこ破いて、その読みたいところをポケットに入れて。そういうことで、少しバカにならなければダメですよ。

皆さんのお仕事はいろいろですが、その自分が賜ったところの、天賦の資質、才能、そこに使命がありますから。それは、聖霊の力でグングン伸ばしてゆく。何であつてもいいです。日本人は、「大学卒」なんて下らないことを言うものだから。私は、高等学校の校長してたときにも言いましたよ、

「何も大学に入らなくてもいいんだ。自分は手仕事が好きなら、どこかそこへ行つて弟子入りしろ」

と。レッテル大学生でパチンコなんかやつてたんじゃしょうがない。パチンコとマンガだから。いや、この頃のテレビは低級になつてきたね、本当に。NHKの知っている人があつたら、言いたいんだ、僕は。大衆におもねっていたらダメだ、大衆を引き上げるようなことをしなければダメだと。

何としても、この福音を我々が伝える天来の義務、使命がある。存在即使命。一人ひとり、展開してゆく。

「どうも私にはできません」

なんてことは絶対ありませんよ。どなたでも、おできになります。み霊が来るから、み霊の力で。

私は無教会にいた時、

「聖霊とか、み霊なんて言つたつて、一体何だろうか？ どういうものか？」

といつてね、結局、無教会時代はダメなんだ、この聖霊が。

「十字架、十字架」

と、いつまでたつても十字架だ。こっち側から仰いでばかりいて。すじはいいんだよ、無教会というのは。すじはいいけれども、これがパリサイになつてしまう。すぐ人を審く。

「どうだこうだ」

といつて。キリストが一番嫌いなのはパリサイだ。己を義として人を審くやつ。

●無者

世界中にキリストのことを、

「無者」

と誰か言つたですか。本当に自分を無くして神さまの中に入っているから、

「我を見しものは父を見しなり」

と。ヨハネ伝はまた素晴らしい。その一如の世界は、ヨハネ伝が一番よく伝えているから。



一如の世界。パウロはなかなか論理的なものと、超論理のと、両方とももっているけれども、ヨハネというのは、スーッとしているからね、本当に。大事な器です、ヨハネは。そういう一如の世界。女の方はそういう世界に入り安いです、男より。男は理屈っぽいからね、すぐ考える。「我思う故に我在り」なんて。考え過ぎる。思案し過ぎてしまう。

直観、内観、靈観、その角度です。それから、いくらでもこれが広くのびてゆく。中心から限りなく光がのびる。「光」という字がその通りだな。そういうように展開していきますから。キリストをもてば、何をしようとしても、それが展開してゆく。大変な人だね、だから主さまというのは。私は、「神さま」じゃダメなんだよ。ボケてしまう。神さまの現象体である、

「我れを見しものは父を見しなり」

のこの「我れ」、キリストという「我れ」。これにやってきて、福音書にきて降参しなければ、ウソですよ。降参して、平伏してしまつて、そうすると、福音書の扉があいてくる。そんな読み方は、普通の今までの無教会ではできない。一生懸命でギリシヤ語の研究してね、

「これはどういう意味だこうだ、これは果たしてキリストが言ったか？」

なんて下らないことばかり言っている。そんな、いわゆる聖書学なんてものは、要らないよ。そんなものは、ご苦労さんなはなしだ。

直観できるです、

「これはキリストの言だ。キリストでなければ、こんな言が発せるか、こんな行為ができるか」

と、はつきり分かつてくる。日蓮さんだつてそうだ。

「南無妙法蓮華経」

が本ものだから。親鸞だつて、

「南無阿弥陀仏」

が本ものだからね。だから、凄いことが発する。

●南無キリスト

いつか親鸞のことをお話しましたね。柏崎で日が暮れた。泊まる所がない。一軒家があつた。

「せめて泊めていただきたいんですが」

といったら、婆さんが、

「乞食坊主か、お前みたいな汚いやつは入れられるか、ここは宿屋ではないぞ」

と言って閉めてしまった。

「せめても、軒下の石を枕にして寝かせていただきますしよ」

と、本当に石枕で寝た。夜中に目がさめて、さっきの坊主はどうしたかなと、雨戸をちょつと開けたら、親鸞の身边に光がさしていた。参った、大変な方だと。それで今度は自分



が動けなくなった。そして、そこに膝まづいた。夜明けになったら、親鸞は目が覚めて、「お前、そこで何しているんだ。どうもありがとう、私はこれで、寝かしてもらったから、さよならする」と。婆さんは、

「いやあ、まことに申し訳なかった」

と、追いかけて行つた。小さな川があつた。親鸞は見るというと、どこが浅いか見えるんです。普通なら舟が要るところを、浅い所をパツ、パツ、パツと向こう側に渡って行つてしまう。

「せめても、何か書いていただきたいんですが」

と。矢立てを出して棹に手巾を渡して、親鸞は、

「南無阿弥陀仏」

と書いた。「南無阿弥陀仏」と私たちは祈つたつて構わない。キリストは南無阿弥陀仏だから。「南無」とは帰依すること。帰れ、帰れという。「仏」は覚者。それを悟りもっているもの。「阿弥陀」、アミッターというの——「アミッターバー」というのは無量光、「アミッターヤー」というのは無量寿——その無量寿無量光を略して「アミッター」といつている。だから、永遠の生命、限らない光。生命と光ということ。

「生命と光を身に付けているような人に帰依しよう」

というんだから、キリストは正にそうなんです。お釈迦さんも。私たちは正に、

「南無キリスト」

なんだ。それを書いた。これ、本当の話なんだ。

人がどう取り扱おうと、そこでもつて、

「どうもありがとう、寝ましたよ」

なんて言つて。そういう境地だね、なにしろ第一級の坊さんは。だから、寝てれば光がさすような人。一流の坊さんの伝記を読むと、もう参るよ、正直。大したもんだ。

法然だつてそうだ。どうもこの所は水が悪くてしょうがない、といえば、チヨンチョンと叩いたら、水が湧いてきて、この水なら大丈夫だと。いくらでもそういう話がある。ウソじゃないですよ、みんな本当です。もう、理屈を語っている世界じゃない。あとは体験、体現するだけのこと。それが本当の言なんだ。

● 霊言の実体はキリスト

はじめことは
「太初に言あり」

という、この「言」というのは、霊言。言の実体はキリスト。神の言の実体はキリスト。我々一人びとりが、

「わが主キリスト」



と告白しているわけです、皆さんね。そうすると、もう我れが我れでなくなるんです。本当の意味で、隣人愛が出てくるんです。相手を助けざるを得ない。人のために祈らざるを得ない。私は夜の十時前後には――毎日同じ人じゃないですよ――いろいろな人のために祈ります。また、何も十時に限らない、思い出せば勝手に。瞬間でいいんだよ。キリストは瞬間に、

「癒えたり！」

と言えば、癒えてしまったでしょ。大変な人だから。我々もそういうような質にだんだん向かっていくわけです。

疑いと恐れは禁物です。疑いと恐れ、分裂、気持の分裂はダメ。

「それでは、分裂しないようにするためにはどうしたらいいか」

と、そうじゃないんだよ。キリストに入れば、そんなものはみんな消えていつてしまうから。工夫は要らないんだ、工夫は。本当の工夫は、キリストを有つと、逆に今度は本当の工夫が出てくる。そして、創造的なことが展開する。

その点で、創造的な力は、何といつても、キリストを有つ人だけがもっている。仏さんの世界は、その創造性においては、どうも欠けるようだね。ただ、創造されたものに、今度は支配されたら、おしまいだ。神のものとして、どこまでも自覚していかないと。大自然も、国も、地面も、自分の家も、私なんか本をたくさん持っているけれども、これも賜りたる拝借物で、その次の人たちに活用してもらいたい。

まあ、聖書だけは向こう側に持っていきたいけれども、聖書も持っていけない、向こう側に往くときには。自分自身が、即ち

「生ける文字」

に、パウロが言っている、

「キリストの文字」

とならなければ。あなた方はまだ若いから、そんなことを私が言ったって、しょうがないけれども。私はもう80も越えようと、もうじきあっち側だから。けれども、本当にちつとも死が恐ろしくなってしまうてね。もういいよ、こんな世界は、どうだって。「どうだって」なんて言っちゃ悪いけれども。

●原動力は聖霊の他ない

昨日、こんなことをお話ししてあった。今度は京都で、夏は多分なさらないでしょうから、京都で6月の始め頃に、各召団の有志たちが、誰でも、ただしどの召団からも必ず一人は来てもらいたいなあ、というわけで――どうしても来れなければ来なくてもいいですよ――そういうことでもって、集まりをしようじゃありませんか。京都の方々にご厄介になりますけれども。そんなのを続けていく。



土曜日の午後から、少し早めに、最初にO先生にお話をさせていただいて、その次に感話懇親会。晩に祈祷会、これはまあ、私がうけもつ。それから、翌日の午前に、もう一辺私が出るかも知れませんが。まあ、私は一回でもいいんだよ。とにかくそういうことで、そんなのを続けましょう。

私は何年できるかは知れませんが。けれども、私がいなくなったって、そんな形態でもって多分なさることになると思います。一年に一回くらいは、顔と顔をあいまみえてね、そして、行きましよう。たまには、どこかでもって、特別の集会を、三年に一辺か、五年に一辺くらいなさったって、それはもう導かれるままだ。何もおきては要らん。

「主に在る兄弟姉妹は互いに相愛せよ」

とヨハネ書翰にたくさん書いてある。それで、お互いの体験を告白しながら、相助けていく。楽しいじゃないですか。そして、新しい人に対して決して垣根をつくらない。

「ああどうぞ、来てください」

と。一人が一人を連れてきたら、大変なことになるよ。是非それはしてくださいよ。伝道なんだ。ただ内側でもっていい気になっているんじゃないやダメなんだ、それは自己満足だから。そういうことを是非していただきたい。

「幕屋の縄を広めてゆけ」

なんて、イザヤも語っています。人がこの福音に入るのを見るほどうれしいことはないです、正直。

私は、とにかく長いこと無教会というところを通って来たから分かるんですけど、どんなに立派そうに見えてもダメなんです、人間は。人の名前を言う必要はありませんが、ああこの人は立派な人だと思っても、人生の終わりになると、実に情けないです、力がない。どんなにガラクタで、躓いたり転んだりしても、キリスト中心に動いている人は、だんだん光ってくる。これは事実が証明します。いわゆる無教会信仰では、下向きのカーブです。我々のは逆カーブ、上向きになるんです。

「外なる人は破れても、内なる人は日々に新たなり」

とパウロが言った通り。男でも女でも、本当の古びざるところの若さというものは、この聖霊の世界にある。

「小池先生はどうしてあんなに元気なんだろうか？」とみんな不思議がる。「あれは水泳やるから元気なんだ」と。水泳もするよ、ボートも漕ぐよ。今、漕いだって、普通の大学生と負けないよ、ぼくは。野尻で証明した。それくらいのエネルギが来るんです。けれども、それは枝葉の話なんだ。原動力は聖霊の他ない。キリストさまで。

●人を福音の世界へ入れてください

なにしろ、湖の上を渉る^{わた}ひとだからね、キリストは。物理法則をのり越えた人だから。



いやあ、驚くよ、正直。復活のキリストはお魚を食べたりした。あれはみんな、ルカ伝の終わりの方は、神学者も牧師もあそこは受けとらない、

「これは宗教的物語だ」

と。そう言いやがったから、私はそのグループから出てしまった。

「冗談じゃない。我々に分かるような、そんな世界じゃないぞ」

「分かる神さまは本当の神さまでない」

と、エックハルトがそう言った。その通り。驚嘆して、

「いやあ、参りました！」

というと、質的にその世界に入っていく。

インドにババジ（マハバ・ババジ）というのがいてね、これが大分キリストに近いようなやつだ。摩訶不思議なことを私は言っているのではないですよ。

その聖霊の愛が、パウロがコリント前書の13章で言っているとおり、それからヨハネの第一書翰の3章、これは凄いところだ。これが本当にキリストの愛を語っている。パウロは13章で、「キリストの」とも言わないし、「聖霊の」とも言わないけれども、「愛は、愛は」と言っている。あの愛は正にその愛なんだ。あの「愛は」は、

「キリストは」

と言ったって構わない。

「キリストに於ける我々は、我は」

と、それでいい。その世界に、現実は無条件に入れられるのが、この無条件恩寵の世界です。それは、遠慮は要らん。本当に入れば、そうなっていく。その現実を本当に自分に告白することができる。そういうクリスチャンが、一体、幾人いるんですか。

「天才は少ないが、本当のクリスチャンはなお少ない」

とキエルケゴールが言った通り。本当に少ない一人ひとりだよ、あなた方は、そういうクリスチャンです。預言者も、使徒たちも、天界から応援してくれるよ。孤軍万軍だ。どうぞ、そうして、人を救ってくださいよ。助けてください。福音の世界へ入れてください。

「キリストさま！」

と言う人間にしてくださいよ。これが、私たちの人生の、本当の内容だ、現実だ、目的だ。

●私の天国はダンテの天国とは違うよ

「意味」じゃない、決して。「意味」の世界はダメなんだ。意味を考えている世界は。

「これはどういう意味か？」

なんて、意味じゃないんだ。

「どういう現^{うつ}か」

というんだ。



「御飯は食べるけれども、聖書は食べない時がありますよ」
じゃダメなんだ。

「聖書は食べるけれども、御飯は食べないこともあります」
と、そうならなくては。

「我れを食らえ、我れを飲め」

とキリストは言っている。ヨハネ伝のあの6章のところは凄いね。「我れを食らえ、我れを飲め」と。「聖晚餐」とか何とか、「聖餐式」なんかやらなくなつていいよ。あなた方は、自由聖餐式を自分でできる。

「キリストを食らえ、キリストを飲め」

と。教会へ行くと、やるよ時々ね、月の何番目の日曜だか知らないけれども。お煎餅みたいなものと葡萄酒を飲み交わしたりなんかしている。だけれども、私は、ただ「形式」といつて侮っているのではない。それを本当にそのつもりでやっているのなら、それはいいよ。けれども、我々はそれすらも要らない。それじゃ、「何も要らない」といつて、無教会では

「信仰のみ」

とやっている。今度は「信仰」が私されている。そんな信仰じゃダメなんです。本当の信仰は、本当に具体的な世界だから、観念で思われている信仰じゃない。私は散々聞かされたからね、「信仰のみ」というやつを。マルチン・ルターを観念的に受けとっているわけだ。だから、ルターが、

「ルッテラーナー、ルター派なんて言わないでくれ、私はただキリストなんだ」

と言った。さすがはルターですよ。そういう第一人者というのを、みんなそのエピソードが、枝葉からなるところの亜流たちが、みんな曲がつたものにしてしまっている、観念にしてしまっている。しかし、カトリックとプロテスタントが戦つたでしょ。あれは人間違い。カルヴィンも悪いことしたよ、殺したりして。あれはダメだよ。宗教の世界で、戦つたらダメですから。だから、マホメットは困るよ。片一方に剣を持って、片一方に本を持って、あれは旧約から来ているんだから。けれども、別にイスラム教の、マホメットの悪口も言いません。どうせ人間は欠けたる存在だから、その良いところを見て、それを光でもつてちゃんとオリエンテーレンしていく、位置づけていく。本当の批判ということは、本当に位置づけるということなんです。悪口言うことじゃない。そして、自他共にどんな展開していく、限りなく。

私の天国はね――まあ、詩のことを言うのはよそうかな、よそうよそう、今言つたら面白くない――それはダンテの天国とは違うよ。ダンテさんは大変な人だ。まあ大変な人だけれどもね、ダンテとゲーテは。では、おしまい。ありがとうございました。

